

て便殿を裝飾するを得たるは誠に意義多きものと信ず。

同『報告書』に収録されている第一回（昭和五年十一月十六日より同六年九月三十日まで）と第二回（昭和六年五月十三日から同年十一月二十五日まで）の議院本館漆塗装工事仕様書抜粋によると、第一回では便殿の彫刻部の乾漆施工、出入口扉の框の溜蠟色艶消塗り、落子の蒔絵（下塗りまで）、皇族室の彫刻部の乾漆施工、第二回では便殿出入口扉落子の蒔絵及び螺鈿、カーテンボックス彫刻部の乾漆、前記以外木部見え掛り全部（四分一木共）の漆塗り、天井決懸部及び小壁四分一木の金粉仕上げ、柱其他全部の金粉磨き仕上げ、皇族室の乾漆部を除く木部見え掛り全部（四分一木共）の漆塗りを施した。ここまでの経費は七万千四百十円が計上され、第二回終了の昭和六年十一月二十五日までに完成された。同『報告書』には第三回漆塗装工事として昭和六年九月五日から十月二十九日までに便殿、皇族室、床周囲寄木の摺漆を行なった記録がある。昭和六年八月、『汎工芸』（第九巻第八号）は、「完成期にある帝國新議事堂の漆工」と題して、漆工の部分に従属している職人数だけでも優に一百余人のものが、美術学校の工場と建設中の議事堂の内部にあつて仕事をしており、柱板のカラトメンのみでも延長七千尺にあまゝり、全部四部幅で、これに用いる金粉だけでも一貫目を要し、漆は約百貫目ときく、と報じた。

鍔金と漆工だけでも二十二万円を計上する工事となつた。

## ⑪ 文部省図画講習会

昭和五年十一月、文部省図画講習会が本校で開かれた（発会式は五日）。『東京美術学校校友会月報』第二十九巻第六号には次の報告書が掲載されている。

### 文部省講習會に對する所感

從來の講習會は漸く其定員數百二十名を上下するに過ぎざりしに、今回は出席者百八十名を超過するに至り、極めて盛況を呈したるは正木〔直彦〕校長多年の御經驗に因る内訓をよく墨守して其立案の衝に當りたる師範科主任平田〔松堂〕教授の方針最も其時機を得たと各講習者のよき理解ありしに由るなるべし。今從來の講習と異なる新方針を列記すれば次の如し。

一、時代の要求が其何れにあるかを洞察し、一に圖畫の實際化、二に地方的適應、三に内容の充實、四に面目一新と云ふ事に意を用ひたり。

一、從來は其期間約三分の二を講義に三分の一を實習に費したるも、今回は三分の二を實習に三分の一を講義時間として、講習員實際の要求に努む<sup>マツ</sup>。

一、時代は漸く毛筆畫勃興の徴あるにより、此好機に於て毛筆畫（日本畫と云ふは狹義の解釋なるべし）を加ふ、此日本畫の實習も最近稀れる事なり。

一、版畫の一種としてエッチングを加へ實際の實習を示せり。

一、「圖案としての繪畫」及び「構成とは」の如き題下に、其講演も亦圖畫の實際化に結びつけ得べきものを選定せり。

各科目に於ける所感

○日本畫實習 平田〔松堂〕教授擔當

志望者六十人線描運筆の練習を平田教授自筆の手に由つて指導し、次いで無木地硯箱を材料として、其表面に胡粉盛上法併に箔押を試みて日本畫の實際應用に利したる爲、非常なる好評を享け、日本畫も亦將來圖畫教育上重要な價值ある事を識らしむと同時に、其指導方法の暗示を與へたるもの如し。

○西洋畫實習 和田〔英作〕教授田邊〔至〕教授擔當

志望者百人

多數はモデルを使用する人體油畫を描き、他は木炭を以て石膏像を描出し、兩教授は熱心各自の畫の前に批評を試み、或は其短を指摘して形を正し、日本畫同様講習員は皆其懇切さに満足の意を表したり。

○エツチング實習 田邊〔至〕教授擔當

志望者五〇人

この講習は恐らく本邦に於ける最初の實習なりし丈、豫備知識なき者は他少の困難を伴ひたるも、稍理解ある者は極めて巧みに印刷を完了せり。

○圖案としての繪畫 伊東〔忠太〕工學博士講演

博士多年に渉る建築學上の蘊奥の一端を披歴せられ、尙其繪畫に造詣深き博士が圖畫教育論の新指針とも云ふべきものを明示せられ、一同熱心に傾聴せり。

○歐洲繪飾史 森田〔亀之助〕教授講演

歐洲の美術史を基調としたるもの故、美術史の教授に當る圖畫

教育者は興味を以て聴講せり。

○構成とは 水谷〔武彦〕助教講演

この講演は氏が獨逸留學中親しく一學生として、獨逸のバウハウスの教育組織とその主張する構成學とを學習したるより獲たる新研究にして、全員其興味を覺ゆること深く、教育上にも實際にも本講演は極めて効果ありしもの如し。

○文部省美術院展覽會

講習期間中の時間外又は休日にも全員とも屢々之を觀覽せり。

○見學

東京市芝浦東京工藝學校〔高等工芸學校〕及銀座伊東屋に開催中の圖畫手工教育展の見學をなす。

備考

聴講者は聴講證明書の下附を申出づるもの多かりしを以て、東京美術學校名義を以て證明書を下附することとせり。

⑫ 帝国美術院附属美術研究所

昭和三年九月に本校敷地内に建設の黒田記念館（350頁参照）が竣工し、美術研究所開設のために必要な備品、図書、写真等の研究資料が備えられ、館内に黒田清輝の遺作を展示する黒田子爵記念室が設けられた。翌四年五月、黒田清輝遺言執行人代表樺山愛輔は、この建物、設備、研究資料等に金十五万円を添えて帝国美術院に寄附。同五年六月二十七日勅令第一二五号を以てここに帝国美術院附属美術研究所（現東京国立文化財研究所）が設置され、同年同月、本校校長正木直彦が本研究所主事に、教授矢代幸雄が所員（主任）に、